佳作

ねぶたに賭ける

青森県青森市立古川中学校
３年　渡辺　太朗

2020 年、2021 年と２年連続で中止になった青森ねぶた祭。今年は、３年ぶりの開催に向けて準備が淡々と進められていた。昨年、私はねぶた師、竹浪比呂央先生に、ねぶた制作に携わりたいという意思を伝えた。コロナ禍であったため、ねぶた制作を手伝うことはかなわなかったが、代わりにねぶた小屋への出入りを許していただいた。しかし昨年、ねぶた祭りは行われず、制作したねぶたは代替イベントでお披露目となった。

そして今年。受検生となった私は、ねぶたと勉強の両立を心に誓い、４月下旬、竹浪先生のところへ向かった。昨年出入りを許していただいたおかげで話はスムーズに進み、念願のねぶた制作に携わることを了承していただいた。小屋入り初日。まだまだ未熟な私は初めてのことばかりで緊張していたが、周りのスタッフさんのおかげで少しずつ慣れていくことができた。

私は、骨組みと紙貼りの工程をやらせていただいた。今年の竹浪先生のねぶたは、ＪＲねぶた実行プロジェクト「鍾馗（しょうき）。」災いを祓う神である鍾馗が、災いである鬼を退治する場面である。鍾馗の表情や肌の色からコロナウイルスに対する怒りを感じる。鋭い眼光を放つ一台である。もう一台は、青森菱友会「龍王。」青森市浅虫に祀られている八大龍王。その八大龍王の中から難陀（なんだ）龍王と沙羯羅（しゃがら）龍王を表現している。龍から吹き出る清水の表現と龍のうねりが美しい一台である。

８月２日。３年ぶりに開催される青森ねぶた祭に気持ちが高ぶりすぎて、私は、祭りが始まる３時間ほど前からねぶた小屋にいた。小屋に並ぶねぶたや参加者の姿を見て「いよいよ青森の夏が帰ってくるんだ。」という実感が強くなっていき、泣きそうになった。小屋からねぶたが出てきたときは背筋に雷鳴が走ったような感動があった。

夜７時。花火の号砲が上がり、３年ぶりの青森ねぶた祭が開幕した！　青森の街に轟く囃子「ラッセラー」の掛け声とともに乱舞する跳人。３年分のエネルギーを爆発させるべく観客に眼光を走らせるねぶた。この２年間の憂鬱だった気持ちが一気に晴れ、感動で涙があふれた。これが青森の夏なのだと。

３日・４日と日にちは経ち、審査日の８月５日を迎えた。今年初めて制作に関わった二台のねぶた「龍王」と「鍾馗」。それぞれねぶた大賞（１位）、知事賞（２位）を受賞した。感無量だった。次の日、授賞式が行われた。そこで竹

浪先生は次のように述べた。
「青森という街からねぶたをなくしたくないんです。私たち制作者にできることは、ねぶたの芸術としての価値を高めることであると思います。」
　私は、先生の元で修業をして、立派なねぶた師になりたい。この夢はずっと変わっていない。
　以前、私は先生にこのようなことを尋ねたことがあった。
　「先生のようなねぶた師になるためには、何をすればいいですか。」
先生は、このように答えてくださった。
　「ねぶたの勉強も大切。ですが、発想力をやわらかくするためには、やはり学校の勉強も大切。」
　私は今年、受検生である。ねぶた師になるという夢を達成するためには、まずは、高校受検という関門を突破しなければならない。だから、努力したい。10 年以上抱いてきた夢をかなえるために、この関門を必ず突破する。いや、突破しなければならない。「ねぶた師になる」という将来の夢をかなえるために、日々の学校生活や勉強を大切にしたい。そうすれば、未来は必ず見えてくると確信している。ねぶたに人生を賭けてしまった以上、やるしかない。